

湯川さんら

17人の教授



記者団に囲まれた湯川さん

京大にさようなら

三月末いよいよ京大を去る湯川さんは二十九日後、久しぶりの記者会見し「いままでもたなごらにならぬはけせんや。定年というは非常によいこととす。私は学問以外知らない人間だから、これからは物理学以外、とめ役みたいな仕事には向いてないし、あかんと思つ」と定年後なんでも素人として楽しんでゆきたい」と語った。

湯川さんは血色もよく元氣な様子で、まず「人生は長いなあと思ふ。近頃うなづかぬが、定年といふキリがあるとはよく、これで多少、出直す気になれる」と、定年を迎える心境について一層、「これからは趣味にいろいろな学問をやりたい。僕は国文

湯川さん

出直すにいいキリ

歴史や文学楽しみます

学などはよく好きで、調べてみたいことがいろいろある。その点、日本は小さい国だが、よいところがたくさんあり、よい国だなあと思ひますね。もう就職はしませんよ。第一、僕はいらぬ仕事とめ役みたいな仕事には向いてないし、あかんと思つ」と定年後の生活設計について語す。

さらに「これから世の中は先の見通しもつかないくらい変わつてゆくとおもうし、それに振返られてくるのもはからしい。そうかといつて博物館行きのような存在にはなりたくないし、まあそのうちにボケてきますよ」と冗談を言い「しかし自分かたのようになんて学問をやりたい。僕は国文

紛争に明け暮れた京大も、こころは静かな年を迎えたが、三月いっばいで七人の教授が定年退官する。ノーベル物理学の湯川秀樹教授(京大基礎物理学研究所長)をはじめ、いずれも長年、研究と教育に業績をあげてきた教員たち。退官後については自分自身でゆくりと自分の研究を再開したい」といふためうづう自道場が多いようだ。

人文社会科学関係では、文学部一が、大学問題検討委員会の委員長の上野智勇(西洋史)重沢俊郎として京大改革にも取り組んできた(中国哲学)の同教授。井上教授。重沢教授は中国哲学史を専心は日本西洋史学の代表的存在だ。論と唯物論の抗争の歴史としてと

ら業績をあげた。人文科では世界的な中国歴史地理研究家の森鹿三(現所長、日本近代化の問題に取り組んできた坂田吉雄教授、教養部では梶野(あさき)教授(ドイツ語)が退官する。理系では理学部が吉沢(はらじ)教授(岩石学)北村(四郎)教授(植物学)後藤(長造)教授(有機化学)の三教授。医学部では手術中の患者に放射線を照射する方法を開発した福田正教授(放射線学)や結核射線の

化学療法の開発に成績をあげた内藤(一)教授も退官する。工学部は山田(彦見)教授(応用力学)多田(政忠)教授(応用数学)小田(良平)教授(有機合成化学)棚橋(誠)教授(建築学)の四教授がさうして退官。棚橋教授は耐震構造研究の草分け的存在で、京都タワー設計者としても有名だ。教養部関係ではインドネシアで応用地球物理学を指導した東中秀雄教授(地学)豊田(章)教授(助教)教授(化学)が学園を去る。

ていたことがスッとまとまった。これと同じように騒ぎがブレイク・ストミングになって、えらいヤツが出るかもしれぬ」といつの間にか感想。「僕は学問即人生と思つて過ごしてきたが、若い人に僕がそうだったといつても通用しない。いやがられない程度に時々基礎研究に若い人にアドバイスします。それに科学者京都会議や平和七人委員会の仕事はやっていきますよ」と談々と大学を去るの感懐を話していた。